



魚から見たらルアーは人工物であり、異物以外の何物でもない。しかしそんな異物をどうすればエサに見せられるか？という負け戦とも言うべき行為の中で、いかにして釣果をあげていくかというところに私は楽しさを見出している。異物をエサと認識させた時点で私の釣りは成立していて、その後のキャッチするまでの過程はエクストラポイントでもいっぺき部分だ。

最後に魚をキャッチした瞬間、出逢えた喜びと共に魚に対して申し訳ないという気持ちにも襲われる。ならば釣りなんてやめてしまえばとも思うのだが、それも出来ない。

大自然の流れの中に生きる美しい魚達は地域によってまた河川によって色彩が微妙に違い、季節によっても変化する。そんな魚を自分の手中に収めると、この出逢いを失いたくないと思う。偽善であるのは承知しながらも、釣りという遊びからは離れることは出来ない。それはやはり、釣りが釣果だけでは語れない遊びであるということに他ならない。

釣りとは「旅」である。私が社会人として、そして釣師として多くを学んだ恩師の教えである。当時、まだ若かった私は、とにかく釣りにたくて釣りにたくて仕方がなく、恩師が何を言わんとしているかあまり考えもせずその言葉を飲み込んでいた。それから私は日本はもとより世界にも足を延ばし釣りという遊びに没頭してきた。その後10年以上、シーバスフィッシングのプロアングラーとして活動してきたのだが、そんな私もプライベートでは川に足を向ける機会が多い。内水面の釣りでは特にその土地を強く感じられる。極端な例ではあるのだが、私はアフリカ大陸の釣行を経験している。

先述述べた旅であることも含め、言うなれば殺伐とした現代社会から逃れる術であるのが釣りという遊びなのであろう。

ところが釣果至上主義である現在のフィッシングシーンにはまるで現代社会そのものの、結果だけを求めるばかりに釣果情報の良い場所にはアングラーが群がり、先行者に声も掛けずスカスカとすぐ隣に入ってくる。特にシーバスシーンに多いこの状況は、ススキをこよなく愛するアングラーの一人としてまったくもって心が痛。

タイガーフィッシュを狙う。そこには常に本やTVで幼いころから見てきたアフリカが存在する。間違いなく自分がアフリカの大地に包まれながら釣りをしていることを常を感じながら釣りをすることができた。

トラウトシーンにはまた昔ながらのマナーが存在し、暗黙のルールのなかに気持ちよく釣りができている気がする。それはやはり昔から言われる、鱒族の魅力を理解できる成熟した大人達の遊びであるということであらう。

出逢った多くの魚達との思い出と同じ位の感動を与えてくれたのは釣果で勝るケニアではなく、タンザニア釣行であった。釣りなのだからもちろん魚を獲りたい、しかし釣りという遊びはそれだけではない。住み慣れた土地から歩踏み出してその土地の自然に触れ、食を喰い、酒を飲み、その土地の人々に触れる。そしてその土地の大自然に育まれた魚達と触れあう。これがそが釣りと釣りという遊びの楽しみ方なのではないか。

1匹の魚の価値を人間社会の物差しとは違う価値観で計れるアングラー達が進むトラウトシーン。そのトラウティスト達が旅の中で選ぶルアーは有名アングラーの影響などは及ばない。本当に使えるルアーのみが選ばれる世界だ。妥協は簡単に見透かされてしまう世界だからこそ、私達は常に現場でモノ創りを行い、本気で遊び、その中で自分たちが必要と思うルアーを創ってきた。

今、恩師の教えが身に染みるほど理解できる。それはシーバスを追い求めているだけでは理解することは難しかったであろう。色々な魚との出逢いを求め釣りと係わって来たからこそ理解することが出来たのだと私は考える。

二匹の魚の価値を、現代社会とは違う価値観で計る。そんなアングラー達に愛されるルアーを創り上げていきたい。

Life & Fishing

Tetsuya Henmi
辺見哲也

二匹の魚の価値を、現代社会とは違う価値観で計る。そんなアングラー達に愛されるルアーを創り上げていきたい。

釣りは「旅」である。私が社会人として、そして釣師として多くを学んだ恩師の教えである。当時、まだ若かった私は、とにかく釣りにたくて釣りにたくて仕方がなく、恩師が何を言わんとしているかあまり考えもせずその言葉を飲み込んでいた。それから私は日本はもとより世界にも足を延ばし釣りという遊びに没頭してきた。その後10年以上、シーバスフィッシングのプロアングラーとして活動してきたのだが、そんな私もプライベートでは川に足を向ける機会が多い。内水面の釣りでは特にその土地を強く感じられる。極端な例ではあるのだが、私はアフリカ大陸の釣行を経験している。

共に魚に対して申し訳ないという気持ちにも襲われる。ならば釣りなんてやめてしまえばとも思うのだが、それも出来ない。

大自然の流れの中に生きる美しい魚達は地域によってまた河川によって色彩が微妙に違い、季節によっても変化する。そんな魚を自分の手中に収めると、この出逢いを失いたくないと思う。偽善であるのは承知しながらも、釣りという遊びからは離れることは出来ない。それはやはり、釣りが釣果だけでは語れない遊びであるということに他ならない。

